

▶ 動機と濟州島あらまし

5月の連休は濟州島へ行こうと思った。日本から近いのでカレンダー通りの5連休で十分実行可能、行ったことがない、韓国最高峰漢拏山(1,950m)に登れる、これが濟州島に決めた動機である。調べるとネットで扱っている「登山ツアー」があり、これは3日間で5万~13万円。5月の連休はもちろん高い方だ。しかし3日間では、運悪く雨の日に登山となることもある。雨降りに登っても何も見

えないし、快適ではない。そこで休日5日間を全部濟州島に当て、天気が一番よい日に山登りをすることを考えた。

週4便だった成田⇄濟州間の空路が3月26日から毎日就航することになり、計画が立てやすくなった。こんな小さな島に毎日飛行機が就航するのは、観光客ばかりではなく、歴史的経緯による濟州島出身の韓国人たちが日本に多く暮らしているからである。

インターネットで捜し当てた(株)AT TOURという濟州島の観光会社に事情を説明して窓口になってもらう。日本語担当の金京美さんとでメールをやりとりし、航空券、ホテルなど予約してもらった。彼女からは、ほかに韓国ドラマ事情など、営業品目外も少し教えてもらい、感謝している(고마워요!)。

5月1日に日本語版、濟州島天気予報のホームページで、



5月4日が漢拏山「晴」とでたので、4日を登山日とすることにした。

濟州島は香川県ぐらいの面積、人口約57万人に対し2005年の観光客は505万人。韓国ドラマ「チャングムの誓い」、映画「シユリ」などのロケ地で韓国最大のリゾート地。島の産業は、観光業が最大で、農作物はミカン、ニンニクなど。全島溶岩台地なので、雨が降ってもすぐ地面にしみこんでしまう。平野部の年間降水量は2044mm。川はある

が、ほとんど涸れ川で、大雨の時だけ水が流れる。水害や、洪水は無い、土砂がないので土砂崩れはないそう。表土がほとんど無いので、どこでも溶岩がごろごろしている。地震がないことや、風が強いのも特徴だ。濟州島は古くは耽羅国という独立国であった。今は平和な島だが、5世紀に百済に帰属し、その後蒙古の元、日本の倭寇、近年の帝国日本、「濟州島四・三事件」など虐げられた歴史があった。主義主張が違って、武力で問題を解決することが無いように願う。

▶ ホテルまで

一行4人は5月3日定刻通り昼過ぎに濟州島到着。飛行場で旅行会社の金京美さんの出迎えを受け、滞在中のホテル代をまとめて支払い、ホテルへ行くためにバスの乗り方を伝授してもらった。

バスの乗車法は料金入れに1000ウォン札を入れる。別の穴から出るお釣り300ウォンのコインを受け取る(料金700ウォンと判っている)。簡単だが、運転手に行く先を告げなければいけない(それは京美さんがしました)。このバスで終点まで乗ればよいそう。最後に乗り込んだAさんの座席がなかったが、かねて聞いていたとおりに、近くの若者が即座に席を譲ってくれた。儒教の国では年長者が偉い。

途中の停留所名は分からなくても、とにかく終点まで行けばいいと思っただけだったのでのんきに構えていた。終点で下車し、タクシーを拾い、京美さんに書いてもらったハングルメモを運転手に見せ、ホテルへ直行。簡単じゃない



濟州市の東海岸にある「咸德里」の泊まったホテル。海水風呂がよかった。

か。空港から直接ホテルへ行ってもよかったのだが、京美さんが我々の風体を見て安い方が喜ばれると判断された可能性があるが、バスに乗るのもおもしろい体験だ。

日本にいるときは、英語の看板を軽蔑にしていた。ここは日本だぞ、アメリカかぶれのアホが、と。だが韓国ではバスの窓から観る、看板はハングル記号列で分からない。まれに英文の看板を見付けるととどたどしくスペルを追い、「ほう tailor 洋服屋か」と必要もないのにむりに読んで喜んだ。遠ざけてしばらく会わなかった継母が実は優しくったのか、と気が付くようなもだった。

停留所を次々と過ぎ、たくさんいた乗客は地元のおばさん1人と、我々4人だけになってだんだん細くなったところでバスは止まった。そこは繁華街を通り抜けた場末といったところでタクシーが通りかかるような場所ではない。いぶかしく思っていると、バスの運転手が「^{카운터} ^{손바닥}!!!」と分からないことを叫んだが、「^{카운터} ^{손바닥}!!!」と言ったのだろう。荷物を抱えてあわててバスを降りた。降りたところは畑に住宅がすこしずつ侵入したような街はずれだ。これは困った、こんな鄙場でタクシーはどうやって拾うのだろう。

道路の反対側で逆方向のバスを待っているおばさんの一団が居た。M女が機転を利かし、このおばさんらに近づいて、「タクシー?!」と尋ねた。1人の勘のよいご婦人が意味を解したのだろう、タクシーの電話番号のようなものが記載してあるカードを取り出し、しきりと韓国語で説明を始めたがもちろん分からない。ご婦人は、この日本人には通じないと観念して、自分の携帯を取り出しタクシーを呼び出してくれた。

彼女が通話を終わると、ちょっとの間をおいてすぐそばの路地から、タクシーが回り込んできた。タクシーの営業所がほんの近くにあったのだ。気が付くとおばさんたちの一団は、ちょうど来たバスに乗り、車中の人になってしまったので、我々はあわただしくバスに手を振ってお礼とした。

タクシーで10分ほど走り、シーズンオフのリゾート地といったふうの村「^{반도끼리}咸德里」に建つホテルに落ち着いた。かなり大きな滞在型のホテルで、冷蔵庫、コンロ、ヤカンなどが備えてあり、新しく快適であった。宿泊日本人は我々だけで部屋は最上階の9階、広さは3部屋27坪(韓国でも日本の坪と同じ)でかなり広い。窓からは、漢拏山のずんぐりした全貌が見渡せた。明日は晴れそうだ。

夕食は、近くの焼肉店に入る。少し日本語の分かるお姉さんがいて、ひとまず安心。旨くて安い焼き肉を食べた。食後、近くのスーパーで行動食用のパン、ミカンなどを仕入れ、旅の疲れもあって早く寝た。

漢拏山には4つの登山コースがあるが、山頂まで登れ



観音寺コースの入山券売り場、運転手の榮培さんを買ってもらった。

るのはこれから登る^{カヌムサ}「^{손바닥}観音寺コース(登り8.7km)」と下山予定の「城板岳コース(9.6km)」だけである。あとの2コースは、1700m地点で合わさったところから上部は立入禁止となっている。これは植生、登山道の荒廃を防ぐため、数年ごとに立入を制限する韓国独特の「休息年制」という制度のためだ。日本でも「混雑100名山」などで見習ってよい考え方と思う。

▶朝5時30分ホテルを出発

登山コースが長いので朝5時30分ホテル出発とした。そのため4時30分起床、部屋でそれぞれ自分で買ったカップ麺を食べる。カップ麺の標記は数字以外はハングルなので、絵柄の激しさ、おとなしさで味を推定する。エビ、イカの絵は海鮮、肉の絵はブタか牛。赤は「辛い」黄色は「普通」など。しかし食べると、赤くても辛いものもあり、日本人の感性による色で辛みを判断できないことを知った。

食事その他を済まし、あわただしく支度をして、ホテルのロビーに降りた。がっしりした体つきで年配の運転手氏がすでに待っていて「佐々木さんですね」といい、握手を求めてきた。もらった名刺を見ると「^{김 영배}金 榮培さん、錬金術師のようにざくざくお金が入りそうなよい名前だ。後日、榮培さんに5時30分迎車は初めてだといわれた。

初夏の北海道のような景色を楽しみ、6時過ぎに観音寺コースの駐車場に着いた。標高約580m。ここがいわば木戸門になっており、入場券でなく「入山券」を払う。1人1600ウォン、約200円である。他の登山口にも同様の入山券売り場があり、入山券と登山地図をくれる。我々は日本語版の地図をもらった。4人なのに1枚しかくれなかったのもう一枚もらったが、実際にもらったのは運転手の榮培さんなので、黙っているともらえないのかもしれない。色刷りのよくできた地図だった。

6時10分、出発。登山口近くに使い終わった多数の杖が捨てられた塚があり、日本と同じことをしていると思った。周りは、芽吹いたばかりのコナラのような雑木林が続く日本の里山とあまり変わらない。

(続く)

▶ 整備された路

韓国で漢拏山は人気があり、休日ともなるとかなりにぎわうそうだ。幸い5月4日は韓国では平日なので、登り始めたときは、他パーティーの気配はなかった。ウグイスの声を時おり聞きながら、芽吹いた樹林の中を緩く斜上した。路幅はかなり広くとってあり、一部を除いて対向者と十分すれ違える広さだ。登山道の両側は張り渡したロープがどこまでも延びて、初心者でも迷うことはない。玄武岩質の巨石累々とした涸れ沢を何本か渡った。

7時55分、比較的大きな谷「耽羅溪谷」の涸れ沢を渡る。標高約840m。すぐにコンクリート造りの「耽羅溪谷小屋」が現れた。ここからは、「蟻項」へ続くやせ尾根をたどる。漢拏山が日本の山道と違うのは「ぬかるみ」が無いことだ。地面の保水力がゼロなので、水たまりができない。従って靴が汚れない、快適である。登山道の一部は長い木道になっている。木道の構造は、長い2本の鋼材をレールのように置き、その上に横置き板をすき間なく敷き詰める。板のすき間が摩擦となるので滑らない。幅も広いので対向者とのすれ違いが難なくできた。日本の木道でも真似をすればよいと思ったが、日本の山で同じ工法をとると泥濘の上に鋼材を置くことになるので、やはり無理か。

標高1000mをすこし超えると、芽吹きが無くなり、季節が戻った。路の両側には、青いスミレが彩りを添えた。さらに進むと、広葉樹の林はなくなり、マツ林になった。山火事後に生えたマツ林かと思ったが、どこまで進んでもマツ林で、これが針葉樹林帯の下まで続いた。

樹床は、背の低い笹が生えていた。標高を上げると笹の葉に最近まで雪で埋まっていた証拠の皺があった。このコースは北面なのでかなり雪が積もったようだ。

「蟻項(개미목)」は、知らぬ間に通過してしまい、やがて視界が開けると、三角峰(1696m)が現れた。マッターホルン状で凛々しいが、実はこの山は単なる尾根の末端で、一方美人だ。なおも行くと見晴らしのよい尾根上に板張りの休憩所があり、小休止をとる。10時10分。



[左] 登山道脇には、現在地を示す案内板と、[右] 一定の間隔を置いて立つコースポスト。「5-4」とは観音寺コース(5)の4番ポストという意味。緊急連絡先電話番号が標記してある。

▶ 同行者の膝に故障が

実は、同行のS女は膝に故障があった。彼女は濟州島行き直前になって、自分なりに調べた結果、行程が長すぎるので山行は辞退すると申し出た。それを他のメンバーが何とか言いこめ、登りと下りのコースを入れ替えて急坂の「観音寺コース」を登る案に変えたのだ。下りが緩い方が膝によいので、下山は傾斜の緩い「城板岳コース」にしたのだが、結果として変化のあるコースを登りにとってよかったと思った。

尾根を離れ、ここから左に下る。三角峰の側面を巻いて、「耽羅溪谷」の源流に降り立つのだ。道は崖際の傾斜地を巧みに抜け、しっかりした木道が続いた。柵の一部が今年の雪で谷側に押し倒されていた。

見上げると「耽羅溪谷」の奥に漢拏山の頂上部分と、それを取り巻く峰が現れた。少し雪が残る水場の枝沢を横切り、耽羅川の河原まで下ると、大ぶりのエンゴサクが咲いていた。

小川を渡り、背後の山を屏風にして建つ「竜鎮閣小屋」に着いた。覗くと中はコンクリートの床で冷たそう。トイレ棟が別にあり拝借。一帯は、まばらな針葉樹林となり高山の雰囲気だ。

ここから登山道は、谷底から左手の尾根をめがけて這い上がり、全コースで最も急勾配となっている。日本の山によくある、小砂がザラザラしたザレ場がないので、登りやすい。振りかえ見る本峰は、山体基部をえぐられて空中にせり出

し、迫力のある北壁を形成している。咲き始めたゲンカイツツジ(玄界躑躅)が陽を浴び点々と眩しい。

息も荒く登り詰めると、そこは広い山稜の小鞍部となっていて、一息つくところだ。標高約1700m。登山道からは見えないが、左側はすぐに尾根の末端となり、襷を付けた岩壁で縁取られた半円形の断崖となる。これを麓から見ると、ピンの蓋「王冠」を



巨岩ゴロゴロの耽羅(タンラ)溪谷を渡る。



一方美人の三角峰



漢拏山頂上北壁とゲンカイツツジ(玄界躑躅)。山の反対側に「白鹿潭」[右写真]がある。



山頂の賑わい。

側面から見たようなので「王冠稜」と呼んでいる地形だ。

ここまで上がると遙か下界が見渡せて、済州市の街並みが青く霞んで見えた。周りの針葉樹やダケカンバは矮小化し、植物の生育には辛そうだ。時計を見れば11時を過ぎ、登山開始からおよそ5時間経過した。標準体力なら今頃山頂だが、我々は軟弱隊なので青息吐息。緩く北方に続く岩尾根を登ればよいだけになり、あと1時間ぐらいで山頂か。露岩の道はときおり階段や木道に変わる。木道にはひも状に切り刻んだ古タイヤを、ネットにして敷き詰めた箇所があり、そこを歩くと膝への衝撃が柔らかでよい。

竜鎮閣小屋を過ぎてからは、登山者が増えて何組かに追い抜かれ、前方からも山を越えて下山する数グループとすれ違った。下山の組は、登頂後の余裕からか、「안녕하세요(アンニョンハセヨ)」といいながら、笑顔で下ってくる。路ばたでにぎやかにしゃべりながら、一休みのグループもいる。日本の山に比べると、若者が多いので登山道に活気があった。

▶いよいよ山頂へ

とうとう、「白鹿潭」を見下ろす山頂の一角にたどり着いた。「白鹿潭」は山頂火口にある小さな池で、実物より名前の方が美しいと思った。それでも見る^{ハルラサン}ことができ嬉しい。

12時5分「山頂」に到着。そこは正確には漢拏山東峰で最高点ではない。頂上の周りは柵で囲ってあり、登山道以外はむやみに立ち入れないようになっている。最高点1950mの西峰は尾根づたいに10分もあれば行けそうだが、入り口には「관음사코스(立入禁止)」の看板があり、行くことは見合わせた。

「城板岳コース」から来た人たちが大勢いたので、周りは



頂上から見た「白鹿潭」、なぜかカラスがたくさん居た[たまたま写っている]。カラスらしからぬ悠々とした飛び方をした。

大賑わいであった。頂上部は板張りのスノコで地面を覆い隠してあり、写真で見た伯耆大山の山頂のようであった。記念撮影後、スノコの一角に陣取り昼食休憩。

行軍訓練らしい青年兵が数十人、軽機関銃を首から下げて「城板岳コース」を登ってきた。銃は銃床がプラスチック製で軽そうだが、プラモデルのようで本物らしく見えない。兵隊さんたちも山頂に着くと解放されて、昼食になった。彼らの軍食は特大の「太巻き」2本で、でかいなーと思いつつ注目していると、兵糧はあっけなく紺色軍服の胃袋に収まってしまった。さすが若さだ。

12時44分に下山開始。旅行会社の車が4時に「城板岳コース」入口で待機の予定だ。緩い階段や、岩混じりの道がながながと続く。登山道から見下ろすとはるか樹海の中に道の帯が吸い込まれ、行く先は遠い。平日とはいえ「城板岳コース」は往来が盛んで、登る人とすれ違ったり、下山の人に抜かれたり、狭いところでは道を譲ったりの繰り返しだった。抜かれることはたびたびだが、抜くことは皆無である。

単調な道だが「ツツジ畑小屋」付近で、咲き始めたゲンカイツツジ、が色鮮やかであった。かなり歩いたが約束の4時は過ぎてしまいそうなので、私が先に行くことにした。快調に飛ばしたが、それでも着いたのは4時を過ぎた。金^{キム}京^{キョンミ}美さんが待ちくたびれた顔で駐車場にいた。しばらくしてがら、仲間のA氏が1人で現れた。A氏によると、さすがに遅すぎて後の2人は置いてきたそう。残りの2人が着いたのは5時過ぎて、5月の連休という忙しい時期に京美さんを待たせてしまい心苦しかった。

牛歩で下山したのでS女の膝は何事もなく、温存できた。

明けて5月5日は、コースを変えて、漢拏山「靈室コース」～「オリモクコース」を歩いた。しかし天気は崩れ、強風と霧が流れる中を歩いたので景色はほとんど見えなかった。こちらのコースは標高差500mだけなので、楽だった。

運転手の榮培さんに、2日続けて山に登る人は初めてだとあきれ顔に言われた。

残りの2日は普通の観光客になって島巡りをした。(終わり)

■注記:「山小屋」現地表記は「避難所」だが日本風に「小屋」とした。